



1995.2.20 No. **BURST CITY 16**

For Revolutionary Resistance

300円

A.R.P

ARP
P.O.Box57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

母なる大地は、生きている！ それは、我々のものだ！

サパティスタ 新たな闘争宣言

昨年8月の選挙の結果、チアパス州知事に当選したPRI（制度的革命党／現在の政権党）のエドゥアルド・ロブレドの知事就任式を3日後に控えた、12月5日付の声明の中で、EZLN（サパティスタ民族解放軍）のマルコス副司令官は、「もし、ロブレドが州知事として押し付けられるのならば、戦争となる。チアパスだけでなく、メキシコ全土で」と警告した。EZLNと、チアパス州知事に立候補していたPRD（民主革命党）のアマド・アベンダーノは、「PRIは、不正選挙と有権者への脅迫を通じて選挙結果を奪い取った」と主張しており、アベンダーノは、自身が正当な選挙の勝利者であると語った。



《今号の内容》

★EZLN12・17声明★EZLN12・30声明★ラカンドン・ジャングル・第3宣言
★変わりゆく世界におけるフェミニストの視点～アウトノメ・フェミニストからの報告★トルコ外交官射殺に関する声明～革命組織『11月17日』／ギリシャ★短信：トルコ共産党ML派が指導者の逮捕に抗議して火炎ビン攻撃～ネオ・ナチ新聞を火炎ビン攻撃～グアテマラで大量虐殺の遺骨発見～パレスチナから



12月6日、サパティスタ解放区内のアグアスカリエンテスにあるE Z L Nの司令部で持たれた記者会見の席上、マルコス副司令官はE Z L N指導部の承認を経た決議文を読み上げた。「平和な市民的抵抗の段階は、チアパスでエドアルド・ロブレドが知事に就任して州の行政権力を奪取した時点で終わるだろう」。そして、「もしロブレドが就任したら、サパティスタは停戦は終了したと見なすだろう」と語った。

また、マルコス副司令官は、12月3日に新大統領エルネスト・セディージョに宛てた書簡の中で、「悪夢へようこそ…あなたは今、不正義、反民主主義、犯罪装置の権化である。…民主主義へ向かう平和的変革のドアを閉じることで、あなたは戦争への重いドアをあけた。(今や)何でも起こりうる」と述べてもいる。

先の大統領選挙でのPRIのセディージョ候補の当選も、もちろん不正選挙の結果として民衆の怒りをかき立てている。12月1日にメキシコ・シティで行なわれた大統領就任の宣誓式に反対して、農民、労働者、PRDのメンバーら1万人が革命記念塔に集まりデモを行なった。軍・警察は激しい弾圧でこれに臨み、投石などで抵抗する人々を打ちすえた。

チアパスにおける状況は、大衆的な運動の盛り上がりに対抗するかのように、変化を見せてはいない。12月3日には、3人の農民運動指導者が会合中に射殺され、サン・クリストバルから30マイル(約50キロ)離れたところでは、別の2人が待ち伏せにあって負傷している。これらは、地主の私兵による凶行と見られている。さらには、タバチュラの町で、釈放を求めてハンスト中の政治囚を支援する「エミリアノ・サパタ・プロレタリア機構」の座り込みは、暴力的に排除され、40人が行方不明、3人が負傷、子供を含む70人が拘留されるなどしている。

エドゥアルド・ロブレドの就任式を実力阻止するとの意志をもって、12月5日から農民たちはチアパスの州都ツクストラ・グティエレスに押し寄せた。兵士が道路に溢れている状況にもかかわらず、7日には数千人が政府庁舎を取り囲んだ。新州知事ロブレドの就任式は、軍による嚴重な警備のもと8日に強行された。反ロブレドのスローガンとサパティスタ支持を叫ぶ民衆は市中心の広場に集まり、インディオの儀式にのっとり、PRDのアベンダーノが州の正当な知事であると宣誓されたのである。アベンダーノは現在の「公式」州政府への税金の支払い停止、医者や教師その他の専門家がチアパスの貧しいインディオのコミュニティーを支援するよう呼びかけた。これ以降、民衆によってチアパス州反乱過渡期政府が樹立されることとなる。

事態が急速に展開する中、E Z L Nは、12月12日付けの声明で「部隊の進撃を準備している。…戦争の再開は差し迫っている」と警告した。これに対し、停戦を継続するとのセディージョ大統領の声明にもかかわらず、連邦軍は主要ハイウェイのパトロール、サパティスタ解放区の空中偵察を頻繁に行なうことで応じた。

12月19日、サパティスタ軍と民衆はチアパス州各地で一斉に行動を起こした。11日から14日にかけて連邦軍の

嚴重な包囲をかいくぐって解放区から出撃した数千人のE Z L N兵士たちは、民衆と呼応して、サン・クリストバルから55マイル(約90キロ)離れたシモヘベル・デ・アジェンデの市庁舎を抵抗なく占拠したのははじめ、合計で38の町を占領した。また、各所で道路封鎖が行なわれた。翌日、連邦軍は占拠された町へ侵攻し、道路封鎖を解除した。サパティスタ軍と民衆は、軍の到着する前に占領した町や道路から撤収し、軍事的衝突は起きなかった。これはE Z L Nが17日に発表した声明において、連邦軍との衝突を回避するよう指示しているためである。

連邦軍は12月26日、サパティスタ解放区への大規模な侵攻を開始した。反乱過渡期政府の声明によると、26日17時に300人の兵士を載せた10機のヘリコプターがサン・キンティンの町に着陸し、翌日には解放区への侵攻の目的をもった700人の兵士を載せた17機のヘリコプターが降下作戦を行なった。その他にも以下のように連邦軍兵士が展開されている。フロル・デ・カフェ1000人、イスカン600人、ベネメリト・デ・ラス・アメリカス300人、モンテ・リバノ1000人、アムパロ・デ・アグア・テンタ1000人以上。セディージョ大統領の発言とは裏腹に、サパティスタ運動を破壊せんとする攻勢的な軍事展開がなされたわけである。これにより、軍事的衝突の可能性が一気に高まった。28日に連邦軍に作戦中止命令が出されたことと、19日から展開された戦争の回避を求めての民衆の抵抗運動の盛り上がりを受けて、E Z L Nは12月30日、1月1日から6日までの道路封鎖も含む一切の軍事的行動の中止を声明した。しかしながらチアパス州の実に80%が軍の包囲下に置かれている状況であり、基本的には停戦が終っていることには変わりはない。

こうした状況の中、12月31日から1月1日にかけて、蜂起一周年を記念した行事が行なわれた。31日の夜、マルコス副司令官のメッセージや音楽が流され、また、年頭の10日間の連邦軍との交戦で命を落とした兵士たちへの追悼が行なわれた。1月1日には、軍事パレードがあり、夕刻からはAK47自動小銃を背負った兵士たちも、メキシコの伝統的な革命歌にあわせてダンスに興じた。記念行事ではあるが、アルコールは禁止されたとのことである。

サパティスタが表明した停戦期間が終了した1月10日に、チコムセロで反乱過渡期政府支持者とPRIを支持

する農場経営者らとの衝突が起き、7人の農民が殺害された。これ以降、農民らは市庁舎を占拠した。

緊迫した状況の中、1月12日にEZLNは停戦の延長を発表した。期間は18日までである。同時に、政府当局者との会談が行われることが明らかにされた。

1月15日、サパティスタ解放区において、サミュエル・ルイス司教の仲介による連邦政府とEZLNの会談が行われた。政府側からは、エステバン・モクテスマ内相、EZLN側は、マルコス副司令官らが出席した。セディージョ大統領が就任してから初めての会談では、公式対話の再開が合意された。

この日、メキシコの「レフォルマ」紙が、EZLNのラモーナ司令官（32歳）が昨年死亡していたことをスクープした。ラモーナ司令官はマヤ系ツォツィル出身の女性で、昨年の政府との和平対話にも民族衣装姿で出席している。スポークスマンの役割を担い、インタビューの一つは、本紙14号に掲載された。死因は、頸部ガンであった。（編集部まとめ）

EZLN 12・17声明

1994年12月17日

メキシコ人民へ／世界の人民ならびに諸政府へ／チャウテモク・カルデナス・ソロールサーノへ／国民民主大会へ／国民調停委員会へ

兄弟たちよ

1. 大統領エルネスト・セディージョ・ポンセ・デ・レオンは、チアパスでの紛争を調整するための、異なる政党に属する立法議員の「複数かつ独立した」委員会の形成を提案した。
2. この提案は不完全である。EZLNは、政府を調停者として認めることは出来ない。これは、政府に対して起ち上がったものなのであり、政府は、この対決において、党あるいは調停者の、どちらの立場にも立つことがあってはならない。

かかる委員会を構成する立法議員に中立を主張できる者はいない。PRI（制度的革命党）は政府の一部である。そして政府に属していない他の党のこれら立法議員は、それと反対の立場にある。調停者の役割を演じることができる国民的勢力は、言うなれば、一切の政党にも属していない「市民社会」にあるのだ。この勢力が、まず停戦を、そして次に休戦を可能としたのである。

さらに、連邦政府当局者の談話に反して、我が人民を反政府の武装せる反乱軍へと押しやった政治的・経済的・社会的状態は固着している。南東部に封じられたが、しかし実は国中を席卷した紛争の解決は、「政府委員会」ではなく、統治者と被統治者間の政治的・経済的・社会的諸関係における深淵なる変化からもたらされるのである。

3. 従って

(A) EZLNは、エルネスト・セディージョ・ポンセ・デ・レオンによって提案された立法機関の委員会の調停を拒否する。

(B) EZLNは、CONAI（国民調停委員会）を、メキシコの市民社会の平和的努力の代表であり、紛争における中立的存在であると認める。そしてCONAIが、EZLNと連邦政府の間の調停者として、有効な役割を演じることができると宣言する。

(C) EZLNは、カルデナスのまわりに集まる社会的勢力と国民民主大会が、賢明なる在野勢力であることを認め、彼らが政治的協力関係から独立して活動し、メキシコ社会と国家の政治的指導者らに、以下の基準が安定した休戦状態をもたらすことを伝えるよう要請する。

1) ベラクルス、チアパス、タバスコ各州における選挙後の紛争の、全政党が満足する解決。

2) チアパス州における民主的暫定過渡州政府の承認。

3) CONAIが、紛争の政治的解決を可能とする中立的な存在であるとの、政府による承認。

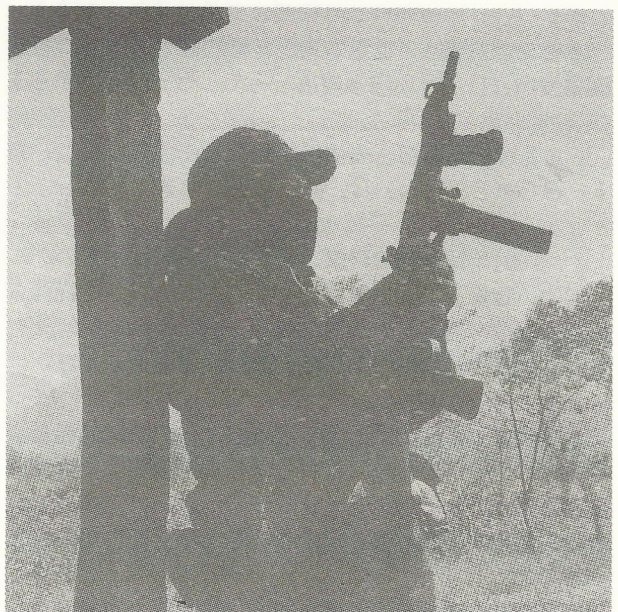
正義と尊厳ある平和をもたらすための、カルデナスと国民民主大会の努力を認め、EZLN総司令部は、サパティスタ兵士たちに、可能な限りメキシコ軍との接触を回避するよう命じる。そして、近い将来にわたって、軍の現在の位置を攻撃しないとの誓約を大衆的に宣言する。

民主主義、自由、正義！

メキシコ南東の山なみから

EZLN総司令部－先住民族地下革命委員会
副司令官マルコス

1994年12月 メキシコ



ラカンドン・ジャングル第3宣言

EZLNは、NLM（国民解放運動）の形成を呼びかける。

サパティスタ蜂起から1年後：今日、我々は言う。

「母なる大地は生きている！そして、それは我々のものだ！我々は恥辱を受けている。それは、本当のことだ。我々は、いつも不運だ。しかし、メキシコの大義とは、人民の権利と正義の大義である。それは、死んではないし、死にはしないだろう。なぜなら、今もなお、良心あるメキシコ人民が存在しているからである。その心は、愛国主義の神聖な炎を燃やしている。共和国のどこであれ、武器があり、国旗はためく所には、このこと同様に活力と精気に満ちた抵抗が存在するのだ。

自由な人々を奴隷にするための道具となる使命を引き受けてしまった愚者たちを、よく知っている。彼の不安定な玉座は、国民の自由意志のもとにあるのではなく、理由なく犠牲となり、ただ自身の自由と正義を守るがゆえに犠牲となった何千人ものメキシコ人の、血と死体の上にあるのだ。

メキシコ人：強奪者の支配下に生きる不名誉にある、これらメキシコ人たちは、重くのしかかる抑圧の軛に耐えることに、自身で終わりをもたらしことはない。途方もない諸業の従事者たちの不実な取り入りに惑ってはならない。何故なら、彼らはいつでも、専制政治の下僕であり、また、これまでずっとそうだったからである。横

暴な権力の存在は、人民の諸権利と正義の永久的な侵害なのだ。これは、時の経過や武力などでは正当化されないし、その破壊が、誉れ高きメキシコ人と人間性にとって必要なのである。

自から宣する。行動と実行において、まさに最初の日の断固たる決意をもって。

—— ベニート・フアレス

1865年1月 チワワにて

メキシコ人民へ／世界の政府ならびに人民へ
兄弟、姉妹たち

1994年1月1日、我々は「ラカンドン・ジャングル第1宣言」を発した。1994年6月10日には、「第2宣言」を発した。どちらも、全メキシコ人のための民主主義、自由、正義の闘いの熱情を受けたものであった。

第1宣言において我々は、我が国における民主主義への移行にとって主な障害物である悪徳政府に対し、武器をとるようメキシコ人民に呼びかけた。第2宣言では、市民的、平和的努力を、我々はメキシコ人民に呼びかけた。これが国民民主大会であり、国民の要求する根源的変革を達成するためのものであった。

最高政府が、その欺瞞と高慢を示威している間、我々は相次ぐ行動によって、我々の要求の妥当性と我々の闘いに根拠を与えた尊厳といった、我々の社会的基盤をメキシコ人民に提示すべく自らを捧げたのである。我々は

EZLN 12・30声明

1994年12月30日

メキシコ人民へ／世界の人民と諸政府へ／内外の報道機関へ

EZLN総司令部－先住民族地下革命委員会（CCR I-GC/EZLN）は、以下のとおり告知する。

1. 1994年12月19日以来、メキシコの男女たちのグループは、断食と絶食を含む様々な形で意志表示を行なった。これは、対話への新たな機会と紛争の政治的解決をもたらす直接的な基準として、停戦の再確定をよびかけるものである。

2. 同意した諸党派による承認以来、国民調停委員会は切迫した戦争の脅威の鎮静化を強く要請した。諸党派間の真摯かつ柔軟な対話への確固とした方向へと着実に牽引するための、新停戦協定に入ることを可能とするためであった。

3. 国際的規模での多様な声が、紛争解決の方法とし

て、停戦と対話を要請する立場を表明した。

4. EZLNは、国内外の大部分の市民社会からの呼びかけに、耳を貸さないでいることはできない。平和のための新たな機会に注意を喚起するために、自らを犠牲にして食物を絶った男女を、どうして座して見ていることができるのか。

5. このために、CCR I-GC/EZLNは、ロス・アルトス、ノルテ、ジャングルの各地域にある軍事勢力に、1995年1月1日から6日まで、全ての軍事的攻勢作戦の中止を命じる。EZLNは、この期間中、世論に委ねられる。

－政府軍のいかなる現下の位置をも攻撃しない。

－交通を遮断する道路封鎖、もしくはその他の軍事行動は行なわない。

－政府軍との衝突を避けるための、必要な距離を置き、これを維持する。

6. 全メキシコ人のための正義と尊厳ある平和のために、真摯かつ柔軟な新対話を可能とする安定した停戦の環境を得よう努めるべく、EZLNはその意志を再確認する。

武器を置いた。合法闘争の可能性と限界を論証すべく、協へと置いたのだ。「ラカンドン・ジャングル第2宣言」においてEZLNは、何よりも戦闘状態の再発を避けることと、住宅、土地、労働、食料、健康、教育、正義、独立、自由、民主主義、平和という我々の11点の闘争課題に含まれる諸要求を解決する政治的な威厳ある正しい解決を探そうとした。

1994年8月の選挙前の過程は、民主主義への移行は選挙という手段で可能となるという希望を、国の各層に持たせた。現状では、選挙が民主的変革への道ではないと知り、EZLNは、合法的反対勢力に闘うための機会を与えるため、一方の立場に立つことに同意した。EZLNは、発言と努力を誓約し、次に民主主義への平和的移行を捜し求めたのであった。国民民主大会において、EZLNは市民的平和的な勢力を求めた。一つは、選挙過程に反対することなく、もちろん熱中もせず、そして世界の他の民主運動とのつながりを持つと同様の、メキシコの民主的階層を含んだ、闘いの新形態を追及することであった。

8月21日は、平和的手段を通じた即時的改革の幻影を終わらせた。腐敗、不道德、不正、違法な選挙過程は、市民の善良な意志への新たな嘲笑をもたらすものと結果したのである。党＝国家システムは、その反民主主義の任務を再確認し、あらゆる分野、あらゆる段階で、その傲慢さを押しつけたのであった。空前規模の有権者の参加に直面して、メキシコの政治体制は欺瞞を選択し、その結果として、選挙過程への希望を断ったのである。国民民主大会、市民同盟、真実のための委員会の報告は、マスメディアが恥ずべき共犯のうちに隠してきたもの、すなわち巨大なゴマカシを明らかにした。不法行為、不公正、腐敗、ゴマカシ、脅迫、強盗、ウソ、それらが選挙を、メキシコ史上最も汚れたものとしたのである。ベラクルス、トラスカラ、タバスコ各州の地方選挙における高棄権率は、メキシコの市民社会を疑念が支配していることを示した。これに満足することなく、知事、市長、地方議会を押しつけることで、党＝国家システムは8月の欺瞞を再び繰り返したのである。19世紀の終わりに、フランスの干渉を正当化すべく、売国奴どもが選挙を行なったごとく、今日、国民は、独裁主義者の欺瞞の継続の承認を歓迎していると言われている。1994年8月の選挙過程は、国家の犯罪である。彼らは犯人として裁かれるべきであり、この「まがいもの」の責任を負っているのだ。

一方、この重大な欺瞞の認識を、一連の「ささいな不法行為」として容認した反対者の戦線において、漸進主義とためらいが見られる。メキシコにおける民主主義の闘いに、重大なジレンマが再発しているのだ。市民の闘いは、民主主義への道を照らす最後の一撃として「苦痛を伴わない」移行に賭けている。しかし、それは苦痛を長引かせるだけなのだ。

チアパスの例は、この政治システムの帰結のなかの、たった一つにすぎない。チアパスの人民の熱望を顧みることなく、政府は、その欺瞞の注入と統治を繰り返す。

広範な拒絶の運動に直面し、党／国家システムは社会に対して、勝利したとの嘘を繰り返し、対立状況を一層激化させることを選択した。南東メキシコでの現在の分裂は、政府の責任であり、本質的にメキシコの政治的・社会的諸問題を解決する能力がないことを証明している。不法行為と抑圧を通じて、政府は問題の解決を試みているのだ。問題は、チアパス人民の意志の正当な勝利が見出された時にのみ、解決することができるのである。EZLNは、今まで、大衆動員の限界で持ちこたえて来た。例え彼らが大規模な中傷と見境のない抑圧にさらされているとしても。

紛争の政治的＝正義と尊厳ある解決を、政府が進んで受け入れるのを待ちながら、チアパスの尊厳である最も良き兄弟・姉妹たちが暗殺され、投獄され、脅迫されているのを、EZLNは無力にも見ていたのだ。ゲレロ、オアハカ、タバスコ、チワワ、ベラクルス各州の先住民族の兄弟たちが、生活環境改善の要求への回答として、抑圧され、嘲りを受けるのも見た。

この期間中EZLNは、連邦軍による軍事包囲、威嚇、脅迫に抵抗するだけでなく、中傷と嘘のキャンペーンにも抵抗した。1994年の最初の数日間、政府は、我々が外国の軍事的支援や資金援助を受けていると非難した。金や行政ポストと引き換えに、我々の旗を降ろさせようとした。我々の闘いを、国家的問題から地方の先住民族問題に矮小化させることにより、正当化させまいとしたのであった。

その間に最高政府は、チアパスそして、絶望と忍耐の限界にある国家での先住民族叛乱の、軍事的解決を準備したのであった。窒息させることでサパティスタ運動を抹殺せんとする野望を隠すだけに終わった、対話への切望の表明の陰では、悪徳政府は、この国の先住民族社会のいたるところで、時間を浪費させ、死を拡大させていたのだ。



一方、組織犯罪と麻薬売人の政治的武器であるPRIは、内紛解決の方法として暗殺にたよることによって、腐敗の最も激しい段階に至りついた。上品な対話の能力に欠けるPRIは、国土に流血をもたらしたのである。PRIの紋章に盗用されたナショナル・カラーに見える恥は、全メキシコ人のものとして存続している。

政府と国家は、この大地の元々の住民を再び忘れた。冷笑癖と怠惰が、国論の位置を占めるべく、立ち戻って来たのである。尊厳ある最低限度の生活条件という権利とともに、先住民族人民は、統治する権利と、理性と意志の下に統治を行なうことを拒否された。我々の仲間の死は、無駄となったのだ。政府が、我々を他の勢力と同じレベルで見えてはいないと理解した我々、EZLNは、あえて軍事包囲を破り、絶望と悲惨にうんざりし、平和的手段に疲れた先住民族の兄弟たちの助力とともに、進撃したのである。どんな犠牲を払ってでも、兄弟たちの血によってメキシコの大地が血塗られることを避けるべく、EZLNは、メキシコ先住民族のゆゆしき状態に、改めて国民の注意を呼びかけなくてはならないと考えたのだ。我々は、おそらく政府の援助を受け、そして5世紀以上にわたって年々引き継ぎ続けてきた窮乏に未だ暮らしている人々に、とりわけ注意を呼びかけた。1994年12月の攻勢によってEZLNは、先住民族の誇りの本質と、全土での政治的・経済的・社会的諸関係における同時的かつ根源的な変革なしには、地方の状態の解決は不可能であることを、メキシコそして世界に示すことを求めた。

先住民族問題は、国民的契約の根源的な変革なしには解決しないだろう。正義と尊厳をもって、国家の先住民族を形体化させる唯一の方法は、それ自身の社会的・政治的文化的特質を認めることである。自治は、分離ではない。それは、現代メキシコの最もみすばらしく忘れられた民族の統合であるのだ。創設以来、このようにEZLNは理解している。そしてこれが、我が組織の指導部を形成する先住民族社会が、定義した次第である。

今日、我々は繰り返す。

我々の闘いは国家的なものである。

我々は、多くの要求をし過ぎるとして、批判されて来た。我々サパティスタは、こう言われる。悪徳政府が我



々に発する政府声明に満足するべきだと。正しく正当な理由のためなら死をもいとわない者たちには、あらゆることを要求する権利があるのだ。我々サパティスタは、全メキシコ人のための民主主義、自由、正義を要求するために、命という我々が持っているたった一つのものを諦めることをいとわない。

今日、我々は再確認する。全ての者のため、全てのためである。我々のためではないのだ！1994年の終わりに、サリナスが国民と国際経済を騙し続けてきた経済の茶番劇が破産した。金権国家は、権力と傲慢の著名な紳士たちを晩餐会に招待した。メキシコの血で彼らが繁栄するためなら、土地と大空を売り渡すことを厭いはしない。経済崩壊は、第一世界の仲間入りをするという、甘く、ぬくるめく夢から、メキシコ人を覚ました。失業、食料不足、困窮の悪夢は、今、メキシコの多数の人々のものとなりつつある。

終わったばかりの1994年は、まさに、我々を支配する残虐な体制の真の姿を示した。ネオ・リベラリズムの、経済的、政治的、社会的かつ抑圧的プログラムは、その本質である、無能力、欺瞞、情け容赦のない不正義を証明した。教義、現実としてのネオ・リベラリズムは、国家の歴史のガラクタの中に投げ込まれるべきである。

兄弟姉妹たち。

今日、この危機の真っ直中で、全ての賢明なメキシコ人たちによる決定的な行動が、国家の運命において、現実で深みのある変革を達成するために必要なのだ。最初に武装するよう、次に市民的平和的闘争を呼びかけた後に、今日我々は、全てのメキシコ人民に、あらゆる手段で、あらゆる地平で、国の全ての場所で、民主主義、自由、正義のために闘うよう呼びかける。以下を用いて…

ラカンドン・ジャングル第3宣言

我々は、国の全ての社会的、政治的勢力、全ての賢明なメキシコ人、国家の民主化の実現のために闘う全ての人々に、国民民主大会や、その他のあらゆる勢力を含めるNLM（国民解放運動）の形成を呼びかける。国家／党システムに反対するのならば、宗教的信条、人種、政治思想を問わない。NLMは、共同調和による闘いであり、あらゆる方法、あらゆる地平で、過渡期政府の設置、新たな立憲体、党／国家システムの破壊に向けて闘う。我々は、国民民主大会と市民カルデナスに、広範な在野戦線であるNLMを主導するよう要請する。

公務員、地方・都市の労働者、近隣の住民たち、メキシコの教員、学生、メキシコの女性、全土の若者たち、賢明な芸術家と知識人、責任ある宗教者たち、種々の政治組織の地域に根ざした戦闘的活動家たちに、我々は、可能であり、かつ必要であると彼らが見なす方法と形態で、党／国家システムに終止符を打つ闘いに取りかかるよう呼びかける。もし、党派に属していないのなら、国民民主大会の一員として、もし、政治的反対勢力に属しているのならば、NLMに参加して。

今ここに、ラカンドン・ジャングル第3宣言の精神を保持しつつ、我々は宣言する。

(1). 母なる大地が連邦政府にとらわれの身となつてからは、メキシコの旗、国家の法制、メキシコの讃歌、国家の紋章は、国家の全領域で、遵法、合法性、主権が回復されるまで、抵抗勢力のもとに置かれる。

(2). 1917年2月15日に起草されたメキシコ連邦の政治憲法は、1993年の革命諸法の結合と先住民族の自治諸法の編入によって、その有効性を宣言された。そして、新憲法の骨子が設定され、新憲法が起草されるまで合法的なものとして保持されるであろう。

(3). 我々は、メキシコ人民が「民主過渡期政府」の承認のために闘うように呼びかける。それは、社会的、政治的諸組織であるべきであり、独自の個別共同体に定義され、1917年憲法において合意に達した連邦条約を保持し、宗教的信条、社会的階級、政治思想、人種、性別を問うことなく、NLMの中に包含されるものである。

EZLNは、遵法、秩序、合法性、国家主権の回復の任務、そして以下の指標を伴う民主主義に向けた国民過渡期政府の形成と設置のために闘いにおいて、市民社会を支援する。

1. 党/国家システムの清算と、真にPRIから政府を分離すること。

2. 以下を保証する選挙法の改正。清潔な選挙、適法、公平、非党派かつ非政府市民の参加、全国民の承認、地域的かつ地方的な政治勢力、そしてそれらによる連邦における新たな総選挙の招集。

3. 新憲法創出のための政体の招集。

4. 自治と市民権を含めた、先住民族の権利を認め、その特性の承認。

5. ウソとペテンを排除し、国土における最も剝奪された部門であり、他人が専有する富の主要な生産者である労働者、農民に恩恵をほどこすことなどを以て、国家



の経済計画を見直すこと。

兄弟姉妹たちよ

平和は、全メキシコ人のための民主主義、自由、正義と手を取りあって来るであろう。我々の道は、我々の死を賭した要求である正義による平和を見いだすことは出来ない。例えそれが、我がメキシコの尊厳を賭したものであるとしても…。大地は眠ってはいない。それは我々の心の中を歩んでいるのだ。我々の死を賭した要求への嘲笑。我々はその恥辱を流し去るために闘う。我々は抵抗する。抑圧と奢りは倒されるだろう。フランスの干渉に対峙したベニート・フアレスとともにあった如く、母なる大地は、今、反民主勢力と権力に反対する愛国勢力とともに進撃している。今日、我々は言う。

母なる大地は生きている！大地は我々のものだ！
民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

EZLN総司令部先住民族地下革命委員会
メキシコにて 1995年1月

(10ページからつづく)

ス郊外の陸軍基地を襲撃して激しい銃撃戦を展開。20人の死者を出している。メンバーの内21人が戦闘の際に逮捕され、投獄されている。

★ベイルートでのパレスチナ・ゲリラの処遇

1月4日、「レバノン政府は、ベイルートなどのパレスチナ難民キャンプのゲリラをパレスチナ自治区へ移動させるフランス政府の提案に仮合意した」というレバノン政府筋の情報が明らかとなった。パレスチナ自治政府を強化するためとされるこの提案は、3か月以上前になされていたもので、ゲリラを自治区のパレスチナ警察に編入することが目的とされている。ベイルートには、イスラエルとの和平合意に反対するファタハ（PLOアラファト議長の支持母体）の分派やその他の拒否派ゲリラもいる。ベイルートからパレスチナ・ゲリラの拠点を一

掃しようとするこの提案については、和平合意を批判するPFLP（パレスチナ解放人民戦線）とDFLP（パレスチナ人民民主戦線）が拒絶の立場を明らかにしている。

★PFLP、蜂起への合流をパレスチナ警察に求める

1月2日のイスラエル軍兵士によるパレスチナ自治警察官の殺害を受けて、PFLPのスポークスマンは4日に、「協定はもろかった。再度、我々は、パレスチナ警察が指導部に反逆し、銃をイスラエルに向けることで、蜂起に合流するよう要請する」との声明を発表した。



変わりゆく世界におけるフェミニストの視点

『革命のために死ぬことは、ほんの「一瞬」のことにすぎない。だが、革命のために生きることは、生き方を変えるという、困難な任務に立ち向かうことである』。

(フランシス・M・ビール／アメリカ人フェミニスト)

私たちが生きている今こそ、起ち上がる時である。世界は目まぐるしく変わりつつある。帝国主義と男権家父長制度による搾取、そして抑圧のメカニズムは、近代の変転の渦の中で、社会の全領域において、その形態を変えつつある。左翼と、女性の運動内における最も革命的な潮流は、新たな方向性を求める局面にある。この新たな世界において、私たちは新たな道を模索していかなければならない。また、世界はより小さなものとなった。すなわち世界中の人々の生活状況といったものが、より一層さらに互いに密接なものとなっていることを意味しているのだ。こうした状況にあって、革命的フェミニズムの最も重要な役割は、国際主義の視点を発展させることである。— その理論と実践において。

革命勢力の発展、国際主義フェミニズムは、革命的展望、希望、夢の大衆の開花を現出させるための、プレコンディション（必須条件）である。このフェミニズム闘争が、抑圧と搾取の歴史の、まさに根源へと到りつくからである。男権家父長制（パトリアーキー）は、男権的価値、男の権力、男による支配の文化の、私たちの知る最も古い抑圧形態である。帝国主義、資本主義、封建主義、これらよりもはるか以前に、男権家父長制度はすでに存在していた。男権家父長制はまた、抑圧者（男性）と、被抑圧者（女性）の、まさに特殊的関係性に基づいたものでもある。女性が男性に対する抑圧者として（社会的、経済的に）非常に集中的な抑圧の諸関係を持ちえたことは、無いからである。この結果として、女性たる私たちは、私たちを抑圧する者を、しっかりと眼を見開いて見据えるのだ。そして男権家父長制に対する闘いは私たち自身の、アイデンティティー、感覚、歴史を奪還するための闘いであるのだ。男権家父長制構造のゆえに女性は、別個の、異質なものの、劣った存在とみなされている。ここから引き出された結論が、殺戮、暴力、レイプ、セクシャル・ハラスメントから、女性の抑圧、ならびに凌辱へと至りつくものであった。

これは、女性であるがゆえに、すべての女性に対し降りかかっていることである。だが、女性間における大きな差異を認識することもまた、重要である。すべての女性が、同じボートに乗っているのではない。韓国の縫製工、ボンベイの物乞い、ケニアの農婦、パリの歌手、モスクワの看護婦。彼女たちが向き合っている現実とは、それぞれ違ったものである。

性差別、階級関係、人種差別、レズビアンへの差別、貧しき国々への帝国主義による搾取、等々…。

これらの要素は、当然ながら世界中の女性たちに、全く異なった生活環境をもたらしている。これが、女性たちが一つに団結しているとは言えない理由なのだ。これらの差異と、ヨーロッパの白人女性たる私たち内部の人種差別と特権の諸問題を認識することは、革命的国際主義フェミニズムの発展において、最も重要なことである。今日の世界情勢と、革命的抵抗闘争の発展の分析において、これを読み解く主要な「鍵」は、フェミニズム運動における「三重の抑圧」構造の省察と、その討論であると、私たちは考える。

★三重の抑圧

三重抑圧論は、今日私たちの直面している抑圧の様々な種類の諸関係、そして／あるいは、諸対立についての伝統的左翼の教義と分析を打ち破る概念である。この概念は、アメリカやイギリスの、黒人フェミニストたち、（ブラック・パンサー党の女性メンバーなど）によって60年代後半に登場、発展したものであった。これらフェミニストたちは、「女性」ゆえに黒人男性に抑圧され、そして同時に、黒人として白人女性に抑圧されているとの意識を持ったのだ。女性たちにとって、これは具体的経験であり、人種差別と性差別の間の諸関係に取り組む革命的分析を、より一層差異あるものとしたのだった。これら女性たちは、彼女たちの白い「姉妹」による人種差別に対しても、闘っていた。だが、彼女たちの努力が他の人々の理解を得るようになるまでには、膨大な時間を費やさねばならなかった。こうした黒人女性の声が聞かれるようになったのは、80年代後半になってからのことである。一部の白人やラディカルな女性解放運動内で、深く議論されるようになり、議論は、今も現在進行形で続いている。（白人女性は、自己内部の人種差別性に向き合うことを避けているのだ！）今日、三重抑圧論の議論は、一般にアウトノーマや反帝闘争運動の総論の一部としてもまた重要な位置を占めている。

三重抑圧論の概念について述べるには、とりわけまず以下のことについて述べねばならない。

▷帝国主義的、家父長制的抑圧と搾取の諸関係は、非常に複雑であり、さまざまな被抑圧下にある諸集団に、異なった結果をもたらしている。すなわちほとんどの民衆が、抑圧を経験してこそのものの、それぞれいづれも



異なった形態であるということである。果たして現実には多くの事実から成り立っているのだ。

▷人間の社会状況と、社会における、その位置にとって明確なるものが、階級、性、皮膚の色（人種）なのは、はっきりとしている。だが他の要素もまた重要である。例えば西側の産業化された国に暮らしているか、あるいは貧困だらけの被植民地に暮らしているのか。あるいはヘテロセクシュアルか、ホモセクシュアルであるか。これらの諸々の要素である。上記の諸状況は、すべて重要であり、相関関係で密接に結びついており、人民の社会状況を現出せしめているものなのである。（例：性差別の抑圧下にある、ロンドンの白人女性秘書。人種差別の抑圧下にあるニューヨークの黒人男性ジャーナリスト。レズビアンゆえに抑圧されたキューバの女性警官。性差別と帝国主義搾取により抑圧されたマニラの売春婦…等々の人々の間に横たわる様々な世界…。）

彼／彼女たちの経験する抑圧は、まさに様々な異なっているものであるが、抑圧の原因は高度な段階では、結局のところ同じものである。すなわち性差別、人種差別、帝国主義を礎とする支配権力ということである。▷3重抑圧論は、伝統的観念に抗しつつ、旧来の左翼の教説を越えるものであった。教説とはすなわち、一般に闘争の過程は、主要矛盾（資本対賃労働）や、あらゆる一切の社会矛盾（女性対男性、黒人対白人など）は、二の次のものであるとされてきた事柄であった。三重抑圧論はまた、既存の革命闘争課題（白人産業社会の労働者階級）や、また革命的前衛（指導的革命党）の概念に抗するものである。これらによる教義、教説は、ただただ現実とは一致していないからである。階級構造の変化と社会の限りなき再編成が意味するものは、「革命のプロセスとは、唯一、民衆間の様々な抑圧されている諸集団間の相互関係を通じた発展と、外的強制を受けない組織された共同のラディカルな闘いを、システムに対して向けることによってなされる」ということなのだ。この関連において革命的女性運動は、非常に重要である。

★すべて我々は、我々が闘う相手の一部に組み入れられている

三重抑圧論は、以下の事実把握によってもまた、理解されねばならない。すなわち、すべて私たち、私たちが闘う相手の一部に組み入れられている、ということ。すなわち自身のうちに、そして私たちをとりまく人々や、人々への私たちの態度のうちにまた、抑圧システムは存在しているというものである。例：女性の多くは、男性によって自分が受けた経験から、自己の受けた侮辱を再生産させて、レズビアンにそれを仕向けるなどしている。女性の多くは、— 革命的左翼内部の女性にも言えることだが — 社会的人種差別を、自身の振る舞いの中に再生産し、有色人種の女性に仕向けている。すべての男性は、いかに彼らが女性の闘いに敬意を払っていても、女性の抑圧によってもたらされる利益の恩恵を受けている。すべての白人は、いかに反人種差別の闘いを



構築すべきか声高に叫ぼうとも、有色人種に対する人種差別の利益の恩恵に与かっている。この見解に、いかに取り組むかのすべを見つけることが、抵抗闘争の任務である。

三重抑圧論とは、支配権力に対する反帝国主義、反家父長制、反人種差別の、外的な闘争と、弁証法的諸関係にある自己自身の精神性と心理に対する、内的闘争である。だが、私たち自身内部の抑圧のメカニズムに対するこの内的闘争が、しばしば軽視されてきたのには、フェミニストの位置が抵抗闘争をつくりあげるまでには至らなかったからである。そう遠くない時代の反帝闘争における二つの例を挙げよう。

▷ニカラグア：1979年のサンディニスタ革命の後も、女性には中絶権を確固としたものとして獲得することはできず、革命のプロセスはラテン・アメリカのマチズモ（男権主義）を根源的に打ち砕くことはできしなかった。

▷パレスチナ：長きにわたり反帝闘争が闘われてきた地パレスチナでは、イスラム原理主義が、以前にも増して影響力を増している。インティファダの中でつくり出された政治的位置から、多くの点で後退を余儀なくさせるものである。フェミニズム的認識に重要な価値を置かない左翼は、これらのことに沈黙で応えるばかりであった。沈黙とは、すなわち承認することなのだ。

上記の、そして他にも数限りない例が示しているのはフェミニストは抵抗闘争を構築しうるものなのであり、そして女性はアウトノメ組織を形成し、自らの認識、展望の獲得のために闘い、「抵抗闘争一般の戦術的必要性」に決して屈伏してはならないということである。

★今日の革命的フェミニズム闘争

理論的に発展し、非常に組織されたラディカルで、ダイナミックな革命的フェミニズムは、今日の支配秩序に対する抵抗闘争の全的發展にとって、絶対的に望まれている。革命的フェミニズムは、国際的諸状況下において作用せねばならず、世界中で抑圧されている女性の様々な闘争と、具体的に見えうる連帯に基づいたものでなければならない。そしてその結果として、その目的は帝国主義諸中枢と、それら中枢内部の男権家父長制構造に対する抵抗、解体闘争を明示するものでなければならない。

私たちが、最重要課題として取り組む闘いは、人口政

策と、その手段たる遺伝学、あるいは遺伝生殖工学への闘いである。人口政策とは、貧しき者、そして何よりも女性の身体の、さらなる植民地化のための「静かなる兵器」に他ならないものなのだ。女性への暴力に対する闘いもまた、重要である。暴力、あるいは暴力の恐怖は、私たち自身が知る以上に、女性の生命を破壊、管理するものである。今現在、社会のあらゆるレベルで私たちの経験している総反撃、巻き返しの興隆期にあって、女性への暴力は増大しつつあり、一層野蛮なものとなっている。革命的フェミニストたちには、人種差別に対する闘い、社会的、経済的排外攻撃（私たちは、女性への貧困の全的転嫁に直面している）に対する抵抗闘争に、自ら参加していく重要な展望や観念が備わっているものであると私たちは考えている。これらは、支配権力たる帝国主義者の世界秩序に対する全般的抵抗闘争の構築と、他者の尊厳に基づく生命の権利による他の世界、すべての人々（女性、子供、男性）の自由のビジョンと認識の創造の内に含まれねばならない。ここヨーロッパにおいて革命的フェミニズムは、国際フェミニズム運動の一部として、また様々に異なった、抑圧されている諸集団（貧しき者、有色人種、「障害者」、レズビアン／ゲイ、獄中者…）の闘争の相互関係の一部として機能せねばならない。これら諸々の集団の闘争が、一つとなり得たなら

ば、必ずや、社会に革命の変革を与えることができるであろう！

しかし、家父長制構造に対する闘いはまた、抵抗闘争それ自身内部において、そして男性との私たち自身の関係性においても、起こりうるものである。どの男性もが長きにわたり注入されつづけてきた男権家父長制構造の特権を放棄するのは、いや放棄できるなど考えるのは幻想であるからだ。さらに私たちはまた、私たち自身に対する闘いに取り組みねばならない状況にある。私たち自身が保持している抑圧のメカニズムを打ち砕くのは厳しい闘いである。私たちと、私たちを取り巻く世界間にある、限定的で、「安全のおける」カーテン越しでしか男性と関わることでできない現実を突破することもまた厳しい闘いだ。しかしながら、各々の女性の個別のプロセスは、フェミニスト解放のプロセスのための、前状況としてあるのだ。

「すべてが自由でない限り、
一人たりとも自由ではない」

アウトノメ・フェミニスト／コペンハーゲン

1994年11月

News Briefs

★大量虐殺の遺骨を発見／グアテマラ

8月18日、グアテマラで180人の先住民の人々の遺骨が発見された。これらの遺体は、1982年から1983年までのエフライン・リオス・M将軍による軍政期間中の1982年7月16日、ソコック、ラビナル両村で先住民の男女・子供ら400人が虐殺された事件のものである。80体の完全骨格と100人分の頭蓋骨の一部が発見されたのは、首都から約100km離れたところにある「プラン・デ・サンチェス」農園であった。虐殺を実行したのは軍の組織した民兵組織PACsで、ゲリラを装って村を訪れて食料の提供を申し出、村人が食料を出すと、ゲリラ＝グアテマラ国民革命連合（URNG）の協力者だとして虐殺を行なった。

★TKP-MLのリーダー逮捕に抗議行動

11月29日、イスタンブールでTKP／ML（トルコ共産党ML派）とTIKKO（トルコ労農解放軍／TKP／MLの軍事部門）の指導的人物とされるアイハン・ウザラが行方不明となった。イスタンブールの反テロ警察部隊によって誘拐された可能性が非常に高い。これに抗議して、ドイツのケルンでは12月5日に、トルコ系銀行2カ所と旅行会社1カ所に対する火炎ビン攻撃が敢行された。TKP／MLのジェブライル・エキジ・コマンドが行動声明を発表した。続いて6日と7日にも連続的にトルコ系企業への攻撃が、マインツ、ウルムなどで行な

われている。

★ネオ・ナチ新聞を攻撃

革命的レスビアン女性グループを中心とする革命的諸グループは、12月4日、ドイツの極右新聞「ユンゲ・フライハイト」に対する一斉攻撃を敢行した。ベルリンでは、同紙を継続して販売している売店と新聞の配送を行なうトラック2両に対する火炎ビン攻撃が行なわれた。ドイツ東部の都市ワイマールでは、同紙を印刷している印刷・出版組合「デュリュッケライ」も、同じく火炎ビン攻撃を受けている。あらかじめ新聞購読者の名簿を奪取した後に攻撃はなされた。この名簿はアンチ・ファシズム運動各グループに配布されている。「ユンゲ・フライハイト」は上品な保守系新聞を装ってはいるが、実際はドイツのネオ・ファシズム運動の最も重要な理論機関紙である。以上のことが明らかとなっているにもかかわらず、インテリや政治家たちは、この攻撃を「言論の自由への攻撃だ」として非難する声明を発表した。この中には、フランスの五月革命での活動で有名なダニエル・コーン・ベンディ（現在は緑の党欧州議会議員）も含まれている。攻撃の後、「デュリュッケライ」は「印刷の中止を検討中」と発表した。

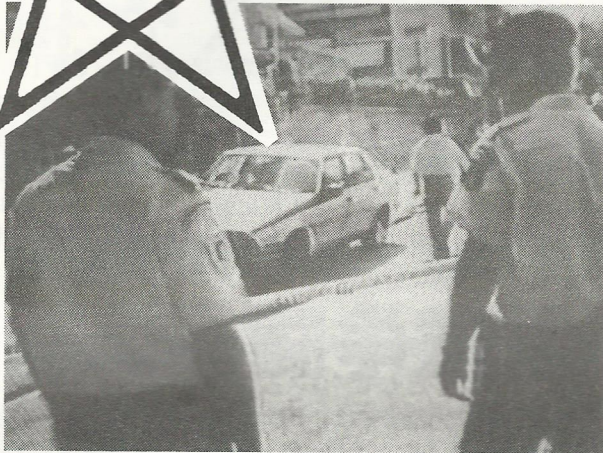
★獄中のゲリラによるハンスト闘争／アルゼンチン

12月8日、18日間にわたってハンストを続けていたゲリラ組織のメンバーの内、一人が病院へ運ばれたが、移送先は不明となっている。このゲリラ組織、MTPLP（大地とともにある運動）は、1989年にブエノスアイレ（7ページへつづく）

革命組織『11月17日運動』声明

17N

攻撃の現場



★トルコ外交官、O. H. シヴァヒオグリュ 攻撃に関する声明

西側メディアで報じられている旧ユーゴスラビアでの事態を、偶発的なものとしてのみ理解する者たちは、以前をはるかに凌ぐ大罪を描き出す新たな専門用語が登場していることに気がつかねばならない。用語、すなわちあらゆる、必要とされる、こと細かな差異によって修飾された言葉。それが現実に基づくものであろうと、疑いに満ちたものであろうと、あるいは一方的なものであろうと、この用語に言及することは、責任を負うべき西側メディア内部において、ある巨大な抵抗を生み出すこととなった。我々が、ここで語っているのは、国民純化、あるいは民族浄化（エスニック・クレンジング）についてのことである。これらは、ある民族が、同じ地図上にたまたま存在している他民族を、肉体的抹殺や地域からの徹底した排除によって、故郷を分断し、追い払わんがために行なわれている。

ゆえに我々は、少数者の権利や国際法に照らして常に物事を注意深く見守っているとされる西側メディアを、観察し続けてきた。また同様に、宗教的信仰心に基づいて、あるいはNATO軍に「人道的」介入を要請し、ボスニアでのモスLEM人への「民族浄化」政策に責任を負う「犯罪者セルビア人」への空爆を要求する西側メディアを構成する世論といったものも、我々は見てきた。

非難にさらされているセルビア人の行為と全く同じことを、クロアチア人、モスLEM人が行なったことが見落とされている。ボスニアにおける「民族浄化」へのセルビア側への制裁として、厳しい経済封鎖がなされた事実も、我々は見てきた。最後通告、威嚇、空爆の実施直前での中止等を、我々は見てきた。

今に至るまで、西側メディアでは一切取り上げられはしなかったことがある。一連の事態がボスニアで起きている一方、これと全く同じこと、すなわち同じ「民族浄化」の犯罪行為が、この20年間、別の場所でも起きていたのだ。決して遠いところではない。キプロスにおいて、まさしく「民族浄化」の定義にあてはまる事態が、トルコ帝国主義の手で、ギリシャ系キプロス島民に対して、なされていたのだ。

●キプロス

1974年、軍事介入。キプロス島の3分の1の領土占領と、キプロス島民2000人の肉体的抹殺。20万のギリシャ系キプロス島民が、島の人口18%を構成する、わずかのトルコ人によって島の北部地域へと追われた。島の人口バランスを変えるために、3万のトルコ人がキプロス島に入植してきた。キプロス占領地に強力なトルコ軍が駐留し、ギリシャ系キプロス島民が、捕虜や難民とされていったのだ。

西側は、ボスニアとは違い、ギリシャ系キプロス島民に対してなされてきたトルコ帝国主義による、この明白な「民族浄化」に何らの対処もしなかった。軍事攻撃は放置され、トルコへの経済制裁や、キプロスからのトルコ軍撤退要求勧告などは一切行なわれていない。この犯罪行為が、アメリカや西欧諸国権力がトルコ軍を強化し、トルコをこの地域の警察官とすることに加担している事実。これらは道徳的、経済的、軍事的支援の下に遂行されたのだということは、全ギリシャ人にとっては周知のことであった。これと平行して今日、アメリカと西欧諸国は、トルコ軍国主義による別の「民族浄化」の犯罪行為に手を貸している。すなわち、トルコ占領下のクルディスタンで起きている事態だ。

民族自決、不可侵の権利 — 1920年のセーブル条約においてさえ保障された権利（アルメニア人は、これに抵抗できずに破れた） — の獲得のため闘っているクルディスタン民族解放戦線（ERNK）のパルチザン戦士に対し、トルコ武装軍が、公然と戦争を遂行している。そして以前にも増して、このトルコ武装軍が、「焦土」作戦を強化させているのだ。何百ものクルドの村々が、計画的に焼かれ、破壊されている。土地に暮らす者は、肉体的に抹殺されるか、イラク領クルディスタンへと暴力的に追放されている。これらはすべて、キプロス同様、トルコ占領下クルディスタンでの、人口バランスを変える企図のもとに行なわれているのだ。この「民族浄化」は、最近、特に激化しており、今や大虐殺の領域へと達しつつある。西側の人々の関心外のことではありながらも、数少ない小さな声が、ようやくトルコでの「人権」抑圧を問い始めた。そして今、西側のとった沈黙という態度によって、悲喜劇がドラマの登場人物に降りかかっている。西側がトルコ軍にボスニア救援を呼びかけた結

果、トルコ軍が国連軍のブルーヘルメットをかぶり、平和維持軍として登場することとなったのだ。キプロスやクルディスタンで、「民族浄化」を遂行しているまさにその軍隊が、である。こうした事態は、明らかに崩壊、破滅、壊滅状況を強化させる行為の一例であり、今日の西側諸権力による、その「新世界秩序」の実演の政治的破産に他ならない。

悪しき占領軍を撤退させるだけでは充分ではないのだろう。その国に、我らが友たるアメリカ合衆国の全面支援を受けつつ、次なる要求が課されねばならないのだ。

●エーゲ — 脅威 — 侵害

エーゲ海域。領空侵犯。ドデカネス諸島、トラキアへの脅威。

この状況の、唯一の政治的回答は、実際に独立せるギリシャ政府が、トルコ軍を撤退させるまでは、一切の交渉に応じず、同時的にキプロス島の防衛を準備することである。

だがこれと対照的に、これまでのネアデモクラティア（ND／新民主主義党）と、現在のPASOK（全ギリシャ社会主義運動）による両売国政府は、マスメディアマフィアどもと結託して、トルコとの新たなダヴォス会議を準備しているのだ。悪人パパンドレウは、トルコと一連の諸問題に関する交渉の用意を開始している。犯罪者どもに有利な立場、キプロス全島占領の脅威下で進められる対話によって、「現実主義」の名の下、合意の署名が犠牲者に強制されるのだ。

ギリシャとキプロスの共通の防衛信条に関する限り、これは単に道標なきPASOK党员どもの不安を取り除くためにもたらされたものにすぎず、欺瞞である。

●世論

さて今、この10年間にわたりなされてきたキプロス戦略研究センターによるキプロス島民による意見、概観を手短かに報告しよう。この研究はギリシャでの、そしてキプロスそれ自身におけるギリシャ系キプロス島民と売国政治屋どもとの間の願望と意識のギャップを、明確に表わしている。

キプロス島におけるトルコ軍の存在についての世論調査では、「全く」もしくは「完全ではないが」、軍の存在に反対してきた事実があった。1982年には70%、1992年には67%が、「イエス」と回答している。また「島全体が占領される危険性」についての質問に、「その可能性あり」と答えたのは、1982年には48%だったものが、1992年は58%となっているのだ！！

ギリシャ側の支援に関する満足度についての問いには「あまり満足していない」「全く不満」としたのは1982年に29%だったものが、1988年のダヴォス会議以後は、49%となり、さらに1992年には46%が「不満」と回答している。

防衛増強計画が、トルコとの交渉にどの程度の影響を与えるかについては、1982年の63%、1992年には67%が「重要な問題」あるいは「十分に影響をもたらさう」

と答えている。

防衛を強化するために、国家が一層の対策を講じねばならないか、という質問では、1982年90%、1992年は85%であった。

そして最後に、防衛を保障するため、国家はさらなる財政的犠牲を支払わねばならないか、との問いには「イエス」と回答したのは1982年は82%、1992年は76%であった。

トルコの外交官幹部の中でも第一級の人物、O. H. シヴァヒオグリュの処刑を、我々は決定した。トルコの政治—軍事システムの要員であり、外交レベルと同時に政治レベルでも、その帝国主義政策を代表して遂行していたこの人物は、クルド人民に対してと同様に、ギリシャ系キプロス島民コミュニティに対しても「民族浄化」行為の大罪に責任を負う者の内の一人であるのだ。こういった政治—軍事システムを代表する者に対しては、我々は今後も攻撃を加える。具体的な結果がもたらされるまで、少なくともキプロス占領軍が撤退し「民族浄化」の犯罪行為が止むまでは、我々はこういった攻撃を継続する。

我々は、クルディスタン民族解放戦線の戦士たちに、熱い革命的挨拶を送る。そしてまた、我々がここで強調しておかねばならないのは、我々は、我々の攻撃をトルコ人に向けているのではない、ということだ。我々の攻撃は唯一、トルコの政治—軍事システムを機能させるファシストどもに対して向けられているのだ。

アテネ／1994年7月4日

革命組織11月17日運動

テオフィロス・ゲオルギアディス・コマンド

付記：テオフィロス・ゲオルギアディスとは、1994年3月20日、キプロス島において、トルコの秘密警察（MIT）に虐殺されたキプロス戦士の名である。真の愛国者であり、国際主義者であったゆえに、彼は虐殺された。彼は、トルコ帝国主義ファシストに対するクルド人民の闘争に、重要な政治的、物的貢献を行っていた。

世界革命運動情報

 **BURST CITY**
For Revolutionary Resistance

★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

（新）00920-0-252923 ARP

（旧）大阪2-252923 ARP